On the Meaning of Poetry and the Novel as Concepts in M. M. Bakhtin's Works: Perspectives on Socratic Dialogues and Carnivalesque Laughter

Atsushi TAJIMA

Summary

The present study investigates the meaning of "poetry" and the "novel" as concepts in Russian literary theorist M. M. Bakhtin's work on "monologue" and "dialogue." Bakhtin's view of the novel is based on a perspective that promotes intersubjective "dialogues" between speakers from different backgrounds, whereas poetry, for him, suggests "monologic" communication between parties who share similar backgrounds.

Bakhtin's investigation of the relationship between Socratic dialogues in ancient Greek and the fools' laughter in medieval carnivals are important to an understanding of his ideas of the novel (dialogue) and poetry (monologue). However, his ideas on these topics cannot be clearly understood without knowledge about the history of ancient and medieval literature, since he rarely cites specific examples in his argumentation. Furthermore, his descriptions of these ideas were not systematically given but were developed in fragments in several of his works.

In this study, I organize Bakhtin's fragmented ideas on poetry and the novel in his significant works; I also cite specific examples of Socratic dialogues, carnival laughter, and other discourses relevant to his arguments, and examine the meanings of dialogues in today's world. The works analyzed in this study are mainly Bakhtin's *Discourse on the Novel*, *Epic and Novel*, *Problems of Dostoevsky's Poetics*, and *From the Prehistory of Novelistic Discourse*.

キーワード
ダイアローグ／モノローグ　小説／詩　ソクラテス　カーニバル　笑い　異化／自動化

Keywords
dialogue/monologue　novel/poetry　Socrates　carnival　laughter　estrangement/automatism

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

バフチン理論における詩と小説：
ソクラテスのダイアローグ論およびカーニバルにおける笑い論を中心的な視座として

田島充士

1. はじめに

ロシア（旧ソ連）において一九二〇年代以降に活躍した文芸学者・バフチンによる「ダイアローグ」に関する思想は、コミュニケーションについての体系的理論として、国際的に知られているものの一つである。バフチンのいうダイアローグとは、慣れ親しんだ生活圏の外に住み、話題を批判的に評価する「他者」とのやりとりを主に示すものであり、またこのやりとりを通して喚起される、話者の意識内で行う多面的な解釈活動をも含むものと考えられる。一方、ダイアローグの反対概念としての「モノローグ」は、話題について、話者による批判的な検証活動のないままの受容にとどまるやりとりを主に示すものといえる。これらダイアローグ・モノローグの性質を解釈する上で重要となる概念が、「小説」および「詩」である。ダイアローグは小説、モノローグは詩と関連づけられ、反対概念としてバフチンの議論において広範囲にわたり論じられている。また小説はカーニバルの笑いとも関連づけられている。

これらの議論は、ヨーロッパにおける詩と小説に関する文学史を背景に展開されている。特に古代ギリシアにおいて記録されたソクラテスのダイアローグ篇に関する議論は、バフチンの小説論において重要な位置を占めている。それにもかかわらず、これらの問題を論じた、本論で主な分析対象とした主要著作を読む限り、バフチンが参照する論拠（特に古代ギリシア時代の文学論）の多くは断片的なものであり、またそれらの議論を解釈するための具体的なコミュニケーション事例もほとんど示されていない。そもそも、なぜ詩と小説が反対概念として扱われるのかという根本的な概念整理の根拠ですら、具体的な史実や事例に即しては、明確に説明されていないのである。

そこで本論においては、主にソクラテスのダイアローグ篇を中心に、バフチンの詩・小説論に関連すると考えられる文学研究やこれらの文学作品中において記述された登場人物らの具体的なコミュニケーション事例を参照し、その内実について考察を行う。なお本論で主な分析対象とする著作は、詩と小説に関する文学史を中心的に論じている『小説の言葉』（バフチン 一九九六）『叙事詩と小説』（バフチン 二〇〇一b）『ドストエフスキーの詩学』（バフチン 一九九五）『小説の言葉の前史より』（バフチン 二〇〇一a）とし、必要に応じて、他の著作からの引用も補足的に行う。

2. 言説としての「詩」と「小説」

本節では、文学のジャンルとしての詩と小説に着目し、それらの文学史における展開とバフチンの議論における「詩」「小説」との関係について考察する。

古代ギリシアにおいて詩は、韻律と定型句を多用する韻文と結びついて語られた物語であり、神話を起源とする文学の歴史においてもっとも古いジャンルの一つとされる（後藤 一九九五、三五七―三五八頁／逸見 二〇一八、六―八頁、二五―三〇頁）。叙事詩の代表例としては、紀元前八世紀頃に成立したといわれる、ギリシア軍のトロイア攻めに関する伝説を歌い上げた叙事詩であるホメロスの『イリアス』『オデュッセイア』があげられる。これらの叙事詩は、神聖な神および神の子孫である英雄たちが展開した様々な出来事や問題に関する、権威ある道徳観・世界観を含むものであった。

この叙事詩は長らく、口承されてきた。そして叙事詩の学習において重要な役割を果たすのは、師匠の朗誦を徹底的に復唱し、その中で語り出される登場人物と感情的に一体化することであり、弟子が自分なりにその内容の意味を再解釈する余地はほとんどなかったとされる（Havelock, 1963, pp.43-47, pp.208-210 邦訳 六一―六六頁、二四六―二四九頁）。

バフチン（一九九六、五三―五八頁／二〇〇一b、四八四―四九〇頁／二〇一八a、一四二―一四三頁）のいう「詩」とは、直接的には、この史実に従うように、聞き手が、個人的な視点からの新たな解釈を行うことなく、話し手のことばを受動的に受け入れる形で展開されるようなジャンルの文学作品を示す概念として定義づけられている。バフチン（二〇〇一b、四八四―四九〇頁）は、詩の対象はそれを聴く人々が生きる現在ないし未来とは隔絶された英雄らによる、権威ある「絶対的過去」であると論じる。

> 叙事詩は、価値というものをまるごと叙事詩的な過去の遠い次元に預けてしまう。叙事詩から見ると、およそ未来に属するものは例外なく（子孫であれ、現在の人であれ）衰退でしかありえない（「そう、わしらの時代にはいたものさ・・・英雄たちがな、お前さんたちは違うが・・・」）。（バフチン 二〇一八a、一四二―一四三頁）

ただしバフチンのいう詩とは、以下の抜粋においても示されるように、実際に交わされるテーマや素材に関わりなく、上述のような話し手と聞き手との間のことばの引用関係において展開する文学作品一般を示す概念としても捉えられている。

> 絶対的過去を描く叙事詩の世界は、その本質からすれば、個人的な経験のおよびがたい世界であり、個人的・個性的な視点から見たり、価値評価をくだしたりすることが許されるものではない。・・・重要なことは、叙事詩の実際の材源が何かだとか、その内容的契機がいかなるものかだとか、はたまた、作者たちの宣言がどうだとかいった点にあるわけではない（バフチン 二〇〇一b、四八九頁）。

さらに詩は、バフチンの議論において「モノローグ」に関

連する概念としても発展的に扱われ得る（桑野 二〇一一、一四五頁）。モノローグは、話し手の発話に対し、聞き手の視点から再解釈することなくそのままの形で受け入れるという関係のもとで展開される言説の特性を主に示す（田島 二〇一九c、二百四頁）。つまり詩は、このようなモノローグ的言説を反映した文学作品群を示す概念なのだといえる。

一方の小説とは、韻律を持たない普通のことば（散文）で書かれた物語であり、文学史的にはもっとも遅れて出現したものとされる（後藤 一九九五、三五八—三六一頁）。後藤は、叙事詩をはじめ既存のジャンルを批評する形で出現したのが小説であったと指摘する。Havelock（1963, p.209 邦訳 二四七頁）も叙事詩を朗誦中の詩人に対し、「それはどういう意味ですか、もう一度言ってください」などという、詩人との陶酔的な一体感を壊すような聞き手独自の解釈を交える問いかけがなされ、そこに詩人なりの内省を交えた返答を行うことは、必然的に散文的なコミュニケーションを導いただろうと論じる。

この史実に従うかのように、バフチン（一九九六、一二—三四頁／二〇〇一b、四八二—四八五頁）は「小説」を、詩とは対照的に、実際に交わされるテーマや素材に関わりなく、話し手のことばを聴く聞き手が、その者の個人的な視点からの再解釈を積極的に交える形で展開するような文学作品一般を示す概念として位置づける。詩が話者の現実から切り離された絶対的な過去（神や英雄の権威的世界）を扱うジャンルなのに対し、小説は話者が生きる「現在」（私たち自身が生きる世界）の視点を活かしたジャンルとして扱われているのも重要な特性の一つである。

> できごとを自己、および自己の同時代人と同一の価値的・時間的レヴェルで描写する（したがって、個人的な経験や虚構をもとに描写する）ということは、根本的な転換がなしとげられたこと、叙事詩的世界から小説的世界へ一歩踏みだすことを意味する。（バフチン 二〇〇一b、四八五頁）

この小説も、バフチンの議論において「ダイアローグ」に関連する概念として扱われ得る（桑野 二〇一一、一四五頁）。ダイアローグは、話し手の発話を聞き手がそのままの形で受け入れず、聞き手の視点から積極的に解釈し直し、話者が互いにこの再編された解釈を交わしあうことで継続し続ける言説の特性を主に示す（田島 二〇一九b、一六〇—一六一頁）。つまり小説は、このようなダイアローグ的言説を反映した文学作品群を示す概念なのだといえる。

以上のように、バフチン（一九九六、三八—七九頁／二〇〇一b、四八四—五〇九頁）の議論において、表面的には、小説（ダイアローグ）は詩（モノローグ）の反対概念として扱われている。そして詩的言説を、人々の抱える独自の視点による積極的な解釈を抑圧するものとして問題視し、小説的言説を、それらの解釈が大いに反映されるものとして理想化しているようにも読み取れる。しかし実は、両概念の関係は相互依存的なものとして扱われ得るとの指摘もなされている（貝澤 二〇一八、一六五—一六六頁）。そもそも小説は、叙事詩や神話を取りこむことで成立してきたものなので、叙事詩と対立するジャンルというよりもむしろ、それに寄生する関係にあるということである。ま

たモノローグとダイアローグとの関係も、必ずしも絶対的に対立するものとはいえない。たとえば、子どもが親との権威的な関係（モノローグ）において学んだことばを苗床に、自分自身のユニークなアイディアを展開していく（ダイアローグ）というような、相互連関的な関係にあるものとしても読み取れるという（Sullivan, Smith, & Matusov, 2009, pp.330-331; 田島 二〇一九b、一七九―一八四頁）。以上の議論を踏まえるならば、バフチンが問題視するのは、特定の言説が小説的（ダイアローグ）にならず、いつまでも詩的（モノローグ）なままであり続けるコミュニケーション状況であって、詩的言説そのものではないとも考えられる。

3. 話者の能動性を示す否定的評価（異化）とラズノレーチエ（言語的多様性）

なお他の話者が発したことばを自分なりの視点から解釈する、コミュニケーションにおける話者の能動性について田島（二〇一九a、一〇八―一〇九頁／二〇一九c、二二二―二三一頁）は、そのことばに情報の共有および、話者独自の視点からの否認・批判が、重要な役割を果たすと指摘する。

田島はバフチンの議論を要約し、言語交流の特性を決める要素として「情報的側面」および「評価的側面」をあげる。情報的側面とは、話し手が発することば・イデオロギー[1]に対する、聞き手の事実的認識を示す。話し手が聞き手に対して期待する、この情報共有の程度は、彼らが展開する言語交流の特性に大きな影響を与える。一方の評価的側面は、話し手が発することばに対する聞き手の主観的な価値判断を示す。これは相手が提供したことばについて、そのまま受け入れられると価値づける「肯定的評価（是認）」と、そのままの形では受け入れずに批判し（「分からない」と内容を理解できなかったことを表明する評価も含む）、多面的な検証が必要なものと価値づける「否定的評価（否認）」に分かれる。

話し手が発することばに関する情報共有と、肯定的な評価が高く期待される聞き手に対しては、話し手は自分が提供する話題内容について内省的にならず、緊張せずに話を行うようになる。その結果、話者の自覚的な言語操作をあまり介さない、スムーズな相互交流が展開することになる。このようなコミュニケーションにおいて生じる話者らの言語認識の特徴は「自動現象・自動化（オートマティズム）」とも呼ばれる（バフチン一九九五、二二九頁）。生活圏を共にする家族や仲間との間で交わされる日常的会話が典型例だが、詩的言説（モノローグ）のように、神話や指導者の権威的な言説を無批判に受動的に受け容れる状況でもこの自動化は促進されると考えられる。

一方、話し手が発することばに関する情報共有が期待できず、また否定的評価が期待される聞き手に対しては、話し手は相手の視点を注意深く吟味し、相手が受け容れ可能な内容や言語的表現について省察した上で、慎重に相互交流を進めねばならない。このようなコミュニケーションにおいて生じる言語認識の特徴は「異化（オストラニェーニエ）」とも呼ばれる（バフチン 一九九五、二九五、二九八頁／一九九六、二五六―二六〇頁）。この異化は、実際の発話前後に行われる、話者の自意識における

想像上の相手との相互交渉を示す複雑な「内的ダイアローグ」（バフチン 一九九六、四四頁）の促進を示すものである。生活圏外に住む、異質な活動文脈を背景に持つ相手とのコミュニケーションが典型例である。話者なりの視点からの再解釈を能動的に行う形で展開される小説（ダイアローグ）は、この異化と親和性が高い概念である[2]。

本論文では、この種の言説を生じさせる人物を、バフチンのいう「他者」と位置づける。

そしてバフチン（一九九六、七十―七二頁）は、話者らが否定的評価を行わずに相手のことば・イデオロギーを受動的に受け容れるにとどまる状況を問題視する。これはいわば、人々のコミュニケーションが詩的な言説にとどまる状況を示す。このような状況の事例として、バフチンは家庭・役所・教会などで異なる言語実践に参加していながら、互いに交わす言語の意味について批判的に検証することなく自動的に使用している農民のエピソードをあげる。彼らはある言語世界のイデオロギーを、異なる言語世界のイデオロギーの視点から批判的に解釈することがなかったとバフチンは指摘し、この農民らのことばに対する態度を問題視する。

一方、これらの農民が異なる言語実践を否定的に評価し、他者としてその関係性を組み直す（すなわち異化する）ようになるコミュニケーション状況を「ラズノレーチエ（言語的多様性）」と呼び、小説と関連づけて理想化する（バフチン 一九九六、七一―七八頁、二〇〇一a、四三八頁）。つまり話者の視点が能動的に活かされる小説とは、人々が詩的言説（既存のイデオロギー）を取り入れ、独自の視点を発揮する他者として、それらを改変するラズノレーチエを実現する言説に位置づけられているのだといえる。

4. 小説としてのソクラテスのダイアローグ篇

そしてバフチンが「ダイアローグ的」と呼ぶ小説ジャンルの始祖の一つとしてあげるのが、古代ギリシアにおいて記録されたソクラテスのダイアローグ篇である（バフチン 一九九五、二二四―二二五頁）。バフチンの小説論において、ソクラテスのダイアローグが描かれたプラトンの初期作品に関する考察は重要な位置を占めており、複数の著作にわたって展開されている（Zappen, 2004, pp.51-55）。

しかしその重要性と比較して、ソクラテスに関する議論は断片的であり、本論で分析対象とした著作において、具体的なダイアローグ事例に即した分析もほとんどなされていない。そこで本節以降、バフチンの議論に関連すると思われる諸研究および、この議論に関連すると思われるソクラテスのダイアローグの具体的な事例を参照し、バフチンの小説論を拡張的に解釈する。

ソクラテスが活躍した紀元前五世紀以降のアテネでは、ペロポネソス戦争の敗退などによる政治経済的な地位の低下にともない、伝統的な価値観が急速に崩壊し、権威ある知的市民の宗教的・道徳的なイデオロギーに対する見解もバラバラになりつつあった（Cornford, 1932, pp.56-58 邦訳八〇―八一頁）。人々は自分たちにとって都合がよいように伝統的な価値観を勝手に

解釈したため、たとえば「勇気」が「無謀な大胆さ」に、「賢明」が「万事に無為」に、「用心」が「臆病」などに結びつけられる始末だった（トゥキュディデス 二〇〇〇、三二八―三三一頁）。プラトンが描くソクラテスは、この気風の中で、社会規範の基盤となるイデオロギーについて、人々とのダイアローグを通した、それらの意味内容の批判的な検証を志向していた。このダイアローグは、「反駁（エレンコス）」とも呼ばれる。

この傾向が特に顕著に見て取れるのは、プラトンの初期・中期作品におけるソクラテスの言動である[3]。これらの作品におけるソクラテスは、ことば・イデオロギーの無自覚かつ恣意的な使用状況を否定的に評価し、それらの意味の再検討を促すダイアローグを導く他者としてふるまう。このことを実現するソクラテスの手法は、一つの事象に対する様々な見解を対比させる「シンクリシス」と、相手をけしかけて意見を最後までいわざるを得なくする「アナクリシス」とも呼ばれる（バフチン 一九九五、二二七―二二八頁）。

以下に示す、『ゴルギアス』からの抜粋であるダイアローグは、根幹的な道徳に関わる「善・悪」および「快・不快」概念の関係について、相手とするカリクレスの主張する複数の考えを確認・引用しながら、ソクラテスがこれらの考えを統合し、それらの間の矛盾点を批判するものである。カリクレスが表明する意見において、道徳律である「善・悪」と人々の感覚である「快・不快」の関係を混同していることが、この抜粋で展開されるソクラテスの反駁から明らかになってきている。

ソクラテス：・・・君が、「渇いているときに飲む」と言う場合には、苦痛を感じていながら同時に快い思いをしているのだ、と言っていることになるのだが。それとも、そういうことが、同じ場所と時間とにおいて、両方ともに一緒に生ずるということはないのかね・・・

カリクレス：それは、そうなる。

ソクラテス：ところで、人はよくやっていながら、同時にまた悪くやっていることは不可能であると、こう君は主張しているのだ。

カリクレス：そう主張している。

ソクラテス：だがしかし、苦痛を感じていながら、快い思いをしていることは可能であるということに、君は同意したのだ。

カリクレス：そうらしいね。

ソクラテス：してみると、快い思いをしていることはよくやっていることではなく、また、苦痛を感じているのも悪くやっていることではない、ということになるのだ。したがって、快は善とは別のものになるわけだ。

カリクレス：何だかわからんけど、あなたは賢い人ぶって屁理屈をこねているのだよ、ソクラテス。

（プラトン 一九七四b、一五二―一五三頁）

この事例に見られるように、ソクラテスのダイアローグ相手は、自分の見解を引用する彼の見解への同意を求められる。ソクラテスは、この相手が同意した見解を論理的に検証し、新たな論に仕立て上げる。その上で、この論に対する矛盾点を指摘するなどの否定的評価を行う。このようにしてダイアローグの相手は、これらのソクラテスの発話を通し、外化され変形され

た自らのイデオロギーを見るわけである。上記の事例のカリクレスは、ソクラテスの発話の中で明らかにされたイデオロギーの矛盾点を抱えた自らの見解に明らかにうろたえ、その受け取りを拒絶しているようにみえる。

バフチン（二〇〇一b、五一八頁）はこのソクラテスのダイアローグを含む小説の特徴を「自己自身にとっての人間」と「他者の眼に映る人間」という、二つの見地の不一致と捉える。上記のカリクレスの立場を例にとれば、話し手自身の自意識を示す「自己自身にとっての人間（カリクレスが最初に提示したイデオロギーに反映）」と、彼の発話に対するソクラテスからの応答からイメージされる「他者の眼に映る人間（カリクレスの発話に否定的評価を下して引用したソクラテスの返答におけるイデオロギーに反映）」との間の不一致と解釈できる。この不一致により、話者が意識内でイメージする自己像は彼／彼女の既存の想像の域を超えるものとなるため、その矛盾について考える内的ダイアローグの働きが必然的に促進され、それまで特に自覚なく使用していたイデオロギーの意味が異化されるのだといえる。

> 内的人間と外的人間のあいだの本質的な不一致があらわれ、その結果、人間の主観性が、最初はくつろいだ雰囲気を醸しだす滑稽な分野において、実験と表現の対象となる。自己自身にとっての人間と他者の眼に映る人間という二つの見地（アスペクト）の不一致があらわれる。（バフチン二〇〇一b、五一八頁）

バフチン（一九九五、二二八―二三〇頁）は、このように否定的評価を下す他者との関係を「土壇場・境界」（別の箇所では同じ用語に対し「敷居」とも訳出される）と呼ぶ。そしてプラトンの作品では、日常生活のパターンから外れたやりとりを通し「言葉をオートマティズムや客体性から解放」して、話者自身の思想の深層を明らかにしようとする志向がみてとれるのだと指摘する。この種のやりとりをバフチンは、「境界線上のダイアローグ」とも呼ぶ。他者と展開するこの境界線上のダイアローグを通し、人々が抱くイデオロギーの無自覚さが暴かれ、その内実について探求する言説としての小説が展開されるのだといえる。

一方、このソクラテスのダイアローグとは対極にある言説としては、自分が話しているイデオロギーに関する自覚もなく、「神懸かり（テイア・モイラ）」状態で道徳律を吟誦する詩人たちと、そのことばを無反省に聴き、神々や英雄たちが展開する叙事詩のエピソードに情動的に共感する聴き手たちとの交流があげられる（中澤二〇〇一、八―十一頁）。プラトンは複数の著作において（著名なものとしては『国家』（プラトン 一九七六、六九〇―七二五頁）『イオン』（プラトン 一九七五c、一五二―一五四頁）など）、ソクラテスにこの種の詩人たちの実践を問題視させている。この言説は、バフチンの議論でいえば詩に関連づく。

詩人たちが展開するやりとりにおいて、聞き手は話し手の発話を肯定的（受動的）に評価して受け止めるため、詩人が語る、神々や英雄に関するイデオロギー（いわば「自己自身にとっての人間」）と、聞き手が受け止めるそれらの解釈（いわば「他者の眼に映る人間」）は基本的に一致する（バフチン 二〇〇一b、五一三頁）。この一致の結果として、話者がそれぞれの意識内

でイメージする自己像は彼／彼女の既存の想像の域を超えるものにはならず、内的ダイアローグも低調となり、イデオロギーの意味は一義的なものにとどまるのだと考えられる（話者らの言語認識の自動化が促進される）。このソクラテスの詩人批判は、市民らに耳障りの善い話を繰り広げ、そのイデオロギーの論理的な根拠を示すことのないまま（本人もその根拠を自覚しないまま）、自分に都合のよい合意を取り付けようとする大衆演説家（ソフィスト）や彼らを利用する権力者たちへの批判をも含むものであったとされる（中澤 二〇〇一、十四―十五頁／西尾 二〇〇四、八〇―八七頁）。

ただしソクラテスの語りは、必ずしもこれらの詩人・権力者らの語りを一方的に敵視し、それらの破壊・排除を試みるようなものではない（Zappen, 2004, pp.13-15, pp.58-63）。むしろソクラテスのダイアローグにおいて、詩人らの語り（彼らの主張を無自覚に受け入れる市民の語りも含め）を積極的に取り込み、彼らのイデオロギーの内実を調べ上げ、その構造を自覚させる協働のような形で成り立っている場面は多い。裏を返すならば、詩人・権力者らとの協働を目指すからこそ、彼らの語りに対するソクラテスの検証はより真摯なものとなり、ソクラテスと彼の相手の語りにおいて展開される内的ダイアローグも複雑化し、緊迫したラズノレーチエになるのかもしれない。つまりプラトンの書くソクラテスのダイアローグ篇もまた、詩（モノローグ）を苗床にして成立した小説（ダイアローグ）なのだといえるだろう。

5. ソクラテスのダイアローグとカーニバルの笑い

バフチン（一九九五、二六五―二六六頁）は、このソクラテスのダイアローグを「カーニバルの笑い」に関わるものだと論じる。

> 《ソクラテスの対話》が、その複雑な文学形式と哲学的深さにもかかわらず、カーニバルを基盤としていることに、疑問の余地はない。死と生、闇と光、冬と夏等々をめぐる民衆のカーニバルでの《議論》、すなわち変転と陽気な相対性のパトスに貫かれていて、一面的な真面目さ、あるいは明快さや一義性へのおぞましい情熱の中にとどまり、そこで固まってしまおうとする考えを許容することのない《議論》が、このジャンルのそもそもの核心にあったのである。（バフチン 一九九五、二六五頁）

ヨーロッパ中世において展開した祭事であるカーニバルの笑いが、古代ギリシアにおけるソクラテスのダイアローグに結びつくという論展開は唐突であり、これらを接続する根拠に関する具体的な事例提示などもほとんどなされない。そのためこの箇所の議論は、バフチンのテキストを理解する上で難所の一つといえる。しかしカーニバルおよび笑いは、バフチンの小説論およびダイアローグ論に関連する概念の中でも主要な位置づけを占めるものでもある。本節では、本論に関わる範囲でのカーニバルと笑いの歴史を概観し、バフチンの議論における、ソクラテスのダイアローグとの関係について考察する。

カーニバル（謝肉祭）は、カトリック・キリスト教を信仰す

る中世・ヨーロッパ諸国における祝祭であり、春の復活祭前、四十日間の精進・断食（節食）を行う四旬節に先立って開催された。仮面を被りコスチュームに身を包んだ人々が、春の訪れを祝い狂騒的なパフォーマンスを行うものが多い。このコスチュームや仮面には道化（ほぼ同義のキャラクターとしての愚者も含む）を始め、異教の神としてのギリシア・ローマや古代ケルト・ゲルマンの神々、悪魔、異教徒の外国人（ムスリムなど）など雑多なモチーフが用いられた。要するに道化は、正統なキリスト教徒の共同体には属さない、外部者の象徴として位置づけられていた（Metzger, 2004, pp.17–18, pp.80-82／森本一九九三、一七六―一七八頁）。またカーニバルの間だけ町を支配する、道化らによる「偽王」が戴冠することもあった。

そしてこれらの道化たちが跋扈する祝祭では、道化の批判内容は子どもと同様、社会的に信用されないという前提の下に、普段の日常世界を支配する強固な身分制の中では不可能であった、政治・宗教的なイデオロギーを日常の卑近な現象などに引き寄せる、滑稽な社会批評・諷刺劇が行われることもあった（Kaiser, 1973, pp.515-517 邦訳 四七―五二頁／ヴェルドン二〇〇二、一五〇―一五九頁／Welsford, 1935, pp.197-217 邦訳一八七―二〇四頁）。この道化は、街の住人が仮面とコスチュームを着用して演じることもあり、同じ街の住人たちの多くが無自覚に受け止めるイデオロギーに対して否定的評価を下した。そのため身元が特定されぬよう、人々は道化のコスチュームで全身を覆い、また指先も露出しないよう手袋を着用する場合もあった[4]。

この祝祭における愚者の社会批判の権利は、ドイツ語圏において「愚者の自由」と呼ばれ、その伝統は今日まで引き継がれている。例えば、スイス・バーゼル市のカーニバルでは、この愚者に与えられた社会批判の自由を守るため、現在も特定の政治・宗教団体や企業などからの献金を受け取らず、市民や参加者からの寄付でその開催費用がまかなわれている（Christen, 2009, p.96）。そして高度な社会批評を行う自由を享受する道化には高い知性をともなう者も多く、その場合、「賢明な愚者」と呼ばれることもある（Kaiser, 1973, pp.517-518 邦訳 五二―五八頁）。

このカーニバルにおける道化のおどけた社会批判には、聖なるイデオロギーと卑俗な日常的事象を逆転させることで、そのままでは無意味な音読やドグマに堕する可能性のある聖書の記述を非聖職者の立場から批判的にパロディ化した、教会の下層聖職者たちの「愚者祭」との関連が指摘される（Welsford, 1935, pp.198-203 邦訳 一八八―一九二頁）。これは本来、聖書など教会の 権威的なテキストを、一見無関係に見える、教会の外で生じる様々な事象との間に滑稽なネットワークを接続していく、知性の増進行為だったという。聖職者たちは、そのままでは慣習化され自動的に認識されてしまう自分たちの言語実践を省察するため、わざわざ、非教会的な視点を導入したということである。

バフチン（一九九五、二四七―二四九頁）はカーニバルを、役者と観客を隔てる「フットライト」のない見世物とも呼ぶ。これは社会的ヒエラルヒーの中で、普段であれば相互接触のない異なる階級世界を背景とした人物同士が出会い、対等な立場で自説を披露しあうカーニバルの史実を下敷きにしていると考えられる。カーニバルには、様々な階層の人間が参加したので

あり（川那部二〇一一、四一―四二頁）、人々は「社会的に信用できない」道化の仮面を外さない限り、説教を行う聖職者や貴族などの上流階級の人間に対してすら、おどけた批判を行うことも可能であった。普段の語る者と聞く者の関係が転倒するフットライトのない見世物において、権威的なイデオロギーと卑俗な日常生活との間に、滑稽で新たな知的連鎖も見出されたのだと考えられる。

> カーニバルにおいては・・・外部の生活では万能の社会的ヒエラルヒーと真っ向から対立する、人間の相関関係の新しい様態が作り出される。・・・自由で無遠慮な関係は価値、思想、現象、事物のすべてに及ぶ。カーニバル外のヒエラルヒー的世界観の中で閉ざされ、孤立し、引き離されていたもののすべてが、カーニバル的接触や結合に突入する。カーニバルは神聖なものと冒瀆的なもの、高いものと低いもの、偉大なものと下らぬもの、賢いものと愚かなもの等々を近づけ、まとめ、手を取り合わせ、結合させるのである。（バフチン 一九九五、二四九―二五〇頁）

このカーニバルにおいて展開する笑いについても、バフチンによる明確な定義的説明がなく、唐突に議論の中に登場する。しかしバフチンのいう笑いは、異化とほぼ同義の概念として解釈できるとの指摘がなされている（桑野 二〇〇九、一七二―一七三頁／田島二〇一九c、二〇〇―二〇二頁）。道化たちのもたらす笑いとは、みなが常識と考えるイデオロギーを再創造しようとして滑稽に失敗することに起因するという Willeford（1969, pp.98-99 邦訳 一五六頁）の説も参考にするならば、バフチンのいう笑いとは、慣習化され自動的に受け入れている話者らのイデオロギーが、道化によって滑稽な批判にさらされることで生じる、言語認識の異化と捉えられるだろう。

このようにイデオロギー批判を行う道化らは、彼らを眺める人々を写す鏡を持つ者として描かれることも多い（Willeford, 1969, pp.30-54 邦訳 六三―九四頁）。人びとは、道化によって滑稽に引用され否定的評価が下された自分たちのイデオロギーを鏡とし、自分たちの世界のあり方を異化する知的刺激を受けるということだろう。

これらの議論を踏まえるならば、バフチンの議論におけるカーニバルとは、道化などの外部世界を背景とする他者と人々の日常的な世界のイデオロギーが交差する、言語的多様性の展開を示すと解釈できるだろう。このことはバフチン（一九九六、二六〇―二六二頁）が、ラズノレーチエを駆動させる人物のモデルとして道化および愚者をあげていることからも示唆される。

ここまでのカーニバルに関する考察の視点から、ソクラテスのダイアローグ篇との関係について考察してみる。

ソクラテスは、カーニバルの道化が行うように、多くの人びとが高尚とみなす概念を、日常生活における卑近な事例に落とし込んで解釈するよう迫ることも多い。以下の『ゴルギアス』からの抜粋は、「法律は劣った人が自分達を守るために作ったもので、優れた人にとって、法律は不要であり遵守も必要ない」と主張するカリクレスとソクラテスとのダイアローグである。当時のアテネでは権力のある市民の間で支持を集めたイデオロギーに近いカリクレスの意見を、ソクラテスは様々な日常

的な事例に落とし込んで、それらの解釈への同意を迫る。権力者と同様に、叙事詩の英雄のような人物を優れた人と主張するカリクレスが、自らのイデオロギーに対する、ソクラテスによる卑近化にたじろぐ様子は、バフチンのいう笑いを引き出すものかもしれない。

ソクラテス：君がより優れた人と言っているのは、より思慮のある人のことではないのかね。どうだね、これは認めるのかね。
カリクレス：それは認める。
ソクラテス：ところで、より優れた人は、より多く持つべきであると、こう君は言っているのではないか。
カリクレス：うん。だが、それは、食べ物のことでもなければ、飲み物のことでもないのだ。
ソクラテス：ああ、わかったよ。でなければ、たぶん、着物のことだろうね・・・
（中略）
カリクレス：・・・あなたはいつだって、靴屋だとか、洗い張り屋だとか、肉屋だとか、そして医者だとかのことばかり話していて、いっこうにやめようとしないのだ。まるでぼくたちの議論は、その人たちのことを問題にしてでもいるかのようにね。
（プラトン 一九七四b、一三三―一三四頁）

このカリクレスとのやりとりにもみられるように、ソクラテスは人々が無自覚に受け入れるイデオロギーに対して滑稽な否定的評価を下すことで、あえて「敷居」を作る他者としての役割を果たしている。そして人びとは自分自身が解釈するイデオロギーに内在する葛藤をソクラテスのことばを鏡として認識し、矛盾する複数の知見を多面的に参照する内的ダイアローグを披露するようになる。

ソクラテスの笑い（抑制されてイロニー化した笑い）やソクラテス的格下げ（職人仕事やありふれた日常生活という、下層の生活圏から借用してきた隠喩や直喩の全体系）は、何ひとつ畏れることなく自由に世界を研究するために、世界を身近に引き寄せ、卑近なものとする。その出発点になっているのは、同時代であり、周囲に生きている人々と彼らの意見である。（バフチン 二〇〇一b、五〇一頁）

その意味でソクラテスは、同じアテネ市民でありながら、他のアテネ市民にとっては異質な思考に基づく批判的な視点を持ち込み続けるという意味での他者＝道化となっているのだろう（バフチン 二〇〇一a、四四一頁）。Zappen（2004, pp.49-50）は『ゴルギアス』において、権力者の語りに荷担するカリクレスらが、ソクラテスの意表を突いた批判に右往左往し、読者に笑いを生じさせるやりとりを、祭の間だけ君臨する道化の偽王の戴冠にたとえる。ソクラテスの相手となる市民たちは、彼が展開する、自分たちにとっては異質な視点から笑われるという、後世のカーニバルにおける愚者の鏡との接触に近い体験することで、自分たちが自動的に受け入れるイデオロギーに対する内的ダイアローグを展開させられるということである。その

意味でプラトンが記録するダイアローグ篇は、他者＝道化としてのソクラテスが、彼と関わる人びとと様々な世界の知との接続を展開するカーニバルになっているのだと捉えられるのだろう[5]。

なおバフチン（一九九五、三三一頁）は笑いを、必ずしもおかしみを前提とするものとしては捉えていない。哲学的でまじめな議論であっても、以上のような変化を人々にもたらす異化作用も含めて、笑いを広く捉えているようである。そのため、ソクラテスによって生じさせられた人々の、おかしみを生じさせない笑いを「希釈された」笑いと呼ぶこともある。

6. ソクラテスが引き起こす笑いのアンビヴァレンス（両義性）

なおバフチン（一九九五、二二七頁）はソクラテスが、弟子のイデオロギーを否定して自分のイデオロギーの優等さをねじ込むような「教師」ではなかった点を重視する。ソクラテスは、以下の『メノン』におけるやりとりに顕著にみられるように、自らが下した結論に対し、否定的な評価を下すことも多い（田島二〇一九c、一九四―一九五頁）。極端な場合、その場での結論を避け、やりとりを終了することもある。

ソクラテス：そうすると、すぐれた人物たちの徳性は生まれつきによるものではない以上、はたしてそれは、学ぶことによって得られるものなのだろうか？

メノン：その帰結はもう動かないように思えます。そして仮説にしたがって徳が知識であるとするならば、ソクラテス、それが教えられうるものであることは明らかでしょう。

ソクラテス：ゼウスに誓って、たぶんね。――しかしひょっとして、われわれがそのことに同意したのは正しくなかったのではあるまいか。

メノン：でもたったいま、たしかに正しいと思われたのですよ。

ソクラテス：いや、少しでもそれに確かなところがあるべきだとするなら、たったいまそう思われたというだけでなく、いまこの現在においても、将来においても、やはり正しいと思われるのでなければならないだろう。

メノン：どうしたのですか、いったい。何のつもりであなたはこの結論に難色を示し、徳が知識であるということを疑うのですか？

（プラトン　一九七四c、三〇一―三〇四頁）

この事例のメノンのように、ソクラテスに正しい知識を教える教師としての役割を期待している者（ダイアローグ篇の読者も含む）は、自らのイデオロギー解釈に対する彼のこのような優柔不断な態度に驚き、笑うだろう。しかしソクラテスは、以下の『ゴルギアス』からの抜粋にも示されているように、ダイアローグを行う以前に知っている知識を弟子に教え込む教師ではなく、自らが知る知識をも批判的に検討し、相手とのダイアローグを通して新たな知恵とする可能性を探る存在なのである。

ソクラテス：・・・そこでもし、諸君のなかの誰かに、ぼくが

ぼく自身に同意をあたえていることは、事実に反していると思われるなら、その人は話の中に割り込んで、ぼくを反駁してくれなくてはいけない。それというのも、いいかね、諸君、ぼくとしては、これからぼくが話そうとしていることは、決して知っていて話すのではなく、むしろ、諸君とともに共同で探求しようとしているからなのだ。・・・

（プラトン 一九七四b、一八二頁）

これは一般に「無知の知」と呼ばれる、ダイアローグに向かう際のソクラテスの態度と響きあうものといえる。この場合の「無知」とは、彼が個々具体的な知識を知らないということではなく、あらゆる相手との意味交渉においても、また様々な具体的な状況においても適用可能な真理（イデア・形相）については分からないという態度を示す（岩田二〇一四、二九四―二九八頁）。形相は、具体的な現象の背後に見え隠れする、抽象的な意味を指す。「敬虔」ということばの意味を追求する上で、具体的事例の列挙ではなく、その背景にある明瞭な「相」を検討するようダイアローグ相手に求める、以下に示す『エウテュプロン』におけるソクラテスのことばからも、彼が求める形相の姿が示唆される。

ソクラテス：・・・ぼくが君に要求していたのは、そんな、多くの敬虔なことのうちのどれか一つ二つをぼくに教えてくれることではなくて、すべての敬虔なことがそれによってこそ、いずれも敬虔であるということになる、かの相（すがた）そのものを教えてほしいということだったのをね。だって、たしか君は、不敬虔なことが不敬虔であるのも、敬虔なことが敬虔であるのも、単一の相によってであると主張していたのだからね。それとも思い出さないかね。

（プラトン 一九七五a、十七頁）

ただし人々をダイアローグの外から批判し、自らの知恵で啓蒙しようとするソフィストとは異なり、ソクラテスは、個々の特殊な状況において人々と共に展開するダイアローグの中で見出される合意を通し、真理を見出そうとしたとされる（高橋一九九五、一八三―二〇二頁）。つまりこれらのダイアローグを離れた人から与えられるような真理の存在をソクラテスは認識しないということである。そして必然的に彼はダイアローグに向かう相手に対し、教師の立場には立たないということになる。たとえ千回の個別のダイアローグを通じて得られた合意によって把握された真理であっても、千一回目のダイアローグにおいて話者個々が抱える主観的視点を満足させることが出来ず、合意が得られない可能性をソクラテスは捨象しないからである。

バフチン（二〇〇一b、五〇〇頁）は、ソクラテスの知に向かう姿勢を「賢明な無知」と呼ぶ。具体的にいえばそれは、上述の『メノン』からの抜粋においてみられるように、他者の意見だけではなく、いったん結論を下した自分の意見に対しても否定的評価を下し、フラフラと自らの最終判断を保留する葛藤に典型的に見られるものになるのだろう。その意味では、ソクラテスは教師ではなく、いわゆる「賢明な愚者」の典型なのだといえる。

さらにソクラテスの批判（特に権力者に対するもの）は、先述のように、必ずしもそれらに対する一方的な攻撃ではない。むしろ彼らを批判する、自分自身の論点を批判する場面もある（Zappen, 2004, p. 118）。そもそも書かれたものに対して批判的であったプラトンは（廣川 一九八〇、四五―五七頁、一六五―一八七頁／金山 二〇一二、一三一―一三四頁）、書くという行為は「まじめな目的」でなされるものではなく、その書かれたものを読むことも「酒盛りのような慰みごと」であるとソクラテスに述べさせている（プラトン 一九七四a、二五九―二六〇頁）。つまり書かれた主人公としてのソクラテスは、書かれた情報としての自らの意見をパロディ化し、これらは信用に値する権威ある意見ではないと自ら否定的評価を下す道化的存在になるのである。このような滑稽な存在にソクラテスがなることで、プラトンは自らのテキストが後世の読者によってモノローグ化され、生きた人々の視点によるダイアローグを抑圧することを拒絶しようとしたのかもしれない。

このような、他者を批判する自らの論点を否定するソクラテスの態度は、「陽気な相対性」（バフチン 一九九五、三三一頁）ないし「アンビヴァレンス（両義的）」（バフチン 二〇〇一b、五〇〇頁）とも呼ばれる。

> このジャンルの主要な主人公（ヒーロー）としてのソクラテス像のなかに、・・・何も理解できない愚者という民衆的仮面と、卓越せる賢者・・・の諸特徴とが統合されていることも特筆に値する。こうした統合の結果、賢明な無知というアンビヴァレントな人物像がもたらされる。ソクラテス的対話に見られるアンビヴァレントな自賛――何も知らないということを知っているがゆえに、わたしは誰よりも賢明である――に注目しておこう。この人物像を中心にして、カーニヴァル化された伝説・・・が生まれる。英雄は道化に姿を変える・・・（バフチン 二〇〇一b、四九九―五〇〇頁）

このようにバフチンの捉えるソクラテスのアンビヴァレントなダイアローグは、特定の権力者を一方的に攻撃したり特定の市民を擁護したりする言説（いわば「革命（レヴォリューション）」）ではなく、権威的なイデオロギーと市民のイデオロギーとの新たな関係を再構築する話者個々人の自意識を刺激する言説になるのだろう。つまり登場人物らが、社会の権威に頼り切ることなく、しかしそれを拒絶することもなく、既存のイデオロギーと自分自身の視点との自律的な調整を行おうとする「小説」を展開するということである。その意味で、ソクラテスの否定的評価は、彼も含めた登場人物一人ひとりが、「自分がいかに生きるか」を自己決定する自意識＝内的ダイアローグを刺激し続けるという意味での、いわば「進化（エヴォリューション）」を展開するものとして捉えられるかもしれない。

このソクラテスのダイアローグ篇に類するジャンルは、時代が下る中で哲学的な生真面目さがうすれ、神や権力者、哲学者たちが道化た批判者によって否定的評価が下されるという類の滑稽話である「メニッペア」と呼ばれる小説に発展していったとされる（バフチン 一九九五、二三一―二三三頁／二〇〇一b、五〇一頁）。その中でも、語り手である作者の批判的視点に権威がなく信用できないことによる、異化を促進するアンビヴァ

レンスは依然として、重要な特徴であったといわれる（北野一九九五、一六―一七頁）。そしてこのメニッペアのジャンル的特徴は、バフチンがダイアローグ論の重要な考察対象としたラブレーの『ガルガンチュア・パンタグリュエル物語』および、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』など後世の小説作品にも引き継がれていると考えられる。

7．エウリピデスの悲劇にみられる小説性と分裂した自意識

なおソクラテスのダイアローグ篇は、ソクラテスとほぼ同時期に活躍した、エウリピデスが描く悲劇との深い関連性が指摘される（Snell, 1964, pp.65-69; Lefkowitz, 2016, pp.26-48）。叙事詩では絶対的な権威であった神託を信用しきることが出来ず、自らの生きる道を求めて右往左往する英雄たちのアンビヴァレントな自意識が展開するエウリピデスの悲劇は、既存のイデオロギーへの盲従をやめ、自らの生き方を求めて葛藤する内面をさらけ出す登場人物らによるソクラテスのダイアローグ篇と響きあうものであり、またバフチンのいう詩と小説の関係を描き出す好材料になると考えられる。

エウリピデスはアイスキュロス、ソフォクレスと並ぶ古代ギリシアにおける三大悲劇詩人の一人だが、一方で、叙事詩の解題としての悲劇の枠組みに飽きたらず、英雄的モチーフに対するパロディを行うなど、むしろ喜劇詩人との共通性も指摘される人物である（中務 一九九〇、四〇六―四一一頁）。なおエウリピデスは「神は人々の道徳的葛藤の解決にほとんど役立たない」と喝破した哲学者・クセノパネスの論に影響を受け（Snell, 1964, pp.54-69）、またトゥキュディデスが描いた当時のアテネの、伝統的な多くの価値観が相対化された時代思潮の影響もあり（丹下 二〇〇八、二三八、三二二頁）、神託や共同体のリーダーが告げる権威的なイデオロギーを鵜呑みにせず（できず）、それらに対して自らの視点から否定的評価を下して再検討を行う登場人物の葛藤する自意識を描いたことでも知られる。

丹下（二〇〇八、二五八―二六二頁）はこの種の自意識の展開例として、父親であるミケーネ王・アガメムノーンを裏切り殺害した母親に対し、アポローンの信託を受けて復讐を果たす青年・オレステースを扱う『オレステース』をあげる。このモチーフは多くの劇作家によって引用されてきた伝統的なものだが、エウリピデスは、父親への敵討ちという神託に従った権威的な道徳観と、母親殺しという個人的な良心の呵責の声との間で葛藤する悩み深きオレステースを描く。この葛藤に満ちた自意識（内的ダイアローグ）は、「シュネシス（知ること）」と呼ばれる（Snell, 1964, pp.48-49; 丹下 二〇〇八、二五八―二六二頁）。

この揺れ動く内的ダイアローグの一端は、母親殺しの罪で死刑宣告を避けるための助命嘆願を無視した叔父のメネラーオスに対する復讐を仲間に誓う、オレステースの長台詞に現れている。

> ・・・何といっても、僕はアガメムノーンの息子だ。自他ともに許すギリシアの支配者で、独裁者ではないが、神授の権力を帯びていた人の子なのだ。虫けらのように死んで、その人の名を辱めはすまい。毅然と命は捨てるが、メネラーオスにも償わ

せてやる。ひとつのことさえ叶えば、僕らとしては大成功なのだから。思いもよらぬ救いがひょいと現れて、殺しはしても死なずにすむ、そうなってくれればなあ。わが望みを言葉の翼に乗せて語り、費えもなしに心を喜ばせるのは、楽しいことだ。
（エウリーピデース 一九九〇、三二〇―三二一頁）

オレステースは仲間に向かい、既存の価値判断からみて英雄にふさわしいイデオロギーと思われる「王の息子として誇らしく死ぬ」という見解を断言した直後に、それとは矛盾する「死なずにすめばいいなあ」という自己保存の欲求を吐露する。オレステースのこの台詞は、自分の身を犠牲にしてアポローンの神託に従うという権威ある英雄として相手から期待される行為像である「他者の眼に映る人間」と、英雄としてはふさわしくない、苦境から逃れて自分の身を守り、生き延びたいという自己保存の欲求を示す「自己自身にとっての人間」という、矛盾する自己イメージ同士が頭の中で否定的評価を下しあう内的ダイアローグの展開を思わせるものである。一般に期待される英雄像を覆す、この滑稽な自意識の吐露に観客＝読者は驚き、バフチンのいう笑いを禁じ得なかったかもしれない。

英雄の言動を巡るこのような個人的葛藤は、神の権威が比較的揺るがない時代においては、わずかしか見られなかったものであるという（久保 一九九二、三九―四一頁）。たとえばホメロスの叙事詩が描く英雄らに物事の決断に迷いが生じる際には、多くの神々が彼らに降臨し、これらの神が与える具体的な助言や指示に従順に従っていた。つまり絶対的に信用できる神の権威的な指示を肯定的に評価してそれに従う「他者の眼に映る人間」と、その指示を内的に解釈して実行に移す「自己自身にとっての人間」はほぼ一致しており、その英雄の様子を叙事詩や悲劇を通して聴く聴衆も、その英雄性を疑わなかったということである。

一方、エウリピデスの多くの悲劇では、登場人物の葛藤を解決するプロセスにおいて神が降臨し指示を与える場面は少ない。『オレステース』でも、主人公の葛藤過程に神は関わらず、登場人物らのダイアローグが混乱し収拾がつかなくなった最後の段階で、機械仕掛けの神（「デウス・エクス・マキナ」）が降臨し、事態収拾を図るに過ぎない。その結果、オレステースのように、神の指示の声と自分自身の声との間で、否定的評価を下し合う葛藤が深まれば深まるほど、「他者の眼に映る人間」と「自己自身にとっての人間」は不一致となり、外部の権威的な道徳律からより一層自律した、個人の自意識が表れることになる（神の権威に従う者としての英雄性は低下する）。

Snell（1964, pp.51-54）は、このような神が介入しない個人の葛藤的な自意識を「心理学的認識力」と呼ぶ。そしてこの種の認識力は、知性による心理の制御を目ざす、ソクラテスのダイアローグと通底するものがあると指摘する。確かに、エウリピデスの登場人物らが展開する葛藤的な自問自答は、ソクラテスとのダイアローグを通して矛盾する自分自身のイデオロギーに直面し、自分の知的能力を通して相互の視点の吟味を行おうとする話者ら（そしてソクラテス自身）の、アンビヴァレントな異化と相通ずるところがある。

バフチンの著作には、古代ギリシアにおける悲劇をより笑い（小説）に近く、叙事詩とは異なるジャンルとして位置づ

けているものもある（バフチン 二〇一八b、一五一―一五二頁）。悲劇は死にゆく運命の主人公を個人の内側から見るので深刻なトーンを帯びるが、変わりゆく世界全体の視点からみれば、個としての主人公の分裂した内的ダイアローグは滑稽でもあり、小説に近い作品もあると解釈され得るのだという（貝澤 二〇一八、一六三―一六四頁）。たとえば『オレステース』では、オレステースのみならず、主要な登場人物が一貫した自意識を持っていない（北野 二〇一一、二七―二八頁）。オレステースの祖父は、夫を殺した自分の娘の罪に対しては私的な復讐ではなく、法によって罰が与えられるべきだったと正論を述べた直後に、街の住人を私的にけしかけてでもオレステースを死刑にすると宣言する。メネラーオスはオレステースを助けると口先では言ったものの、彼を弁護するどころか、裁きの場に出かけることもしない。彼らはみな、自らに期待された役割を拒絶し、自己保存に走ろうとして人々の笑いをとる滑稽な道化のようである。

一貫したイデオロギーを信奉する英雄性が排された結果、観客＝読者はそれぞれの登場人物の発する個々のメッセージを注意深く読みとり、読者自身の視点から戯曲全体の解釈を行わなくてはならなくなる。その意味で北野（二〇一一、二九―三一頁）は、このエウリピデスによる『オレステース』をバフチンのいうアンビヴァレンスをともなうカーニバルに通じる作品であると位置づけている。実際、神の権威を信用することができず、自己保存の動機にも揺り動かされて優柔不断にことばを翻し続ける主人公らの内的ダイアローグの吐露は滑稽である。その意味において、このエウリピデスの悲劇の主人公たちのやりとりは、ソクラテスのダイアローグ篇と同様、社会規範のモデルとしての権威的な規範を神や英雄に見出そうとする聴衆の期待を裏切り、彼らの自意識を刺激する、アンビヴァレントな笑いを引き起こす小説になり得るのだろう。

8. まとめ

本論文では、ソクラテスのダイアローグ篇を中心的な考察対象とし、バフチンの詩（モノローグ）論および小説（ダイアローグ）論について分析を行ってきた。最後に、他者の否定的評価が笑い（異化）を促進し得る（ダイアローグがカーニバル的になる）ための条件に関するバフチンの考えを紹介したい。バフチンは、他者との境界線上のダイアローグが継続していくためには「愛・好意」の存在が必要であることを示唆する。

> ただ愛のみが、対象の内側にある自由を見いだしてその像を描くことができる。・・・愛は境界を愛しみ愛撫する。境界はあらたな意義を獲得することになるのだ。愛は対象が不在のところでその対象を語ることはなく、その対象そのものと一緒にそれを語らう。（バフチン 二〇一八a、一四五頁）

> 好意のある境界設定、そして協同。自分の立場と自分の視点の相関的（部分的）真実性を開示（積極的）する・・・境界を定めることは多ければ多いほどよい、好意のある設定であればだが。畦のうえに喧嘩なし。協同。国境地帯の存在

（そのうえでいつも新しい思潮や学説が起こる）。（バフチン一九八八、二八八頁）

少なくとも著者が本論で分析対象とした資料を読む限り、愛・好意に関するバフチンの記述は断片的であり、その意図を必ずしも明確に解釈できてはいない。しかし本論で検討してきた論に即して考えるならば、話者の「自己自身にとっての人間」である自意識の独自性を最大限に引き出す、他者（典型的には道化）による否定的評価に対する尊重の念が愛・好意であると推測できる。

たとえば、ソクラテスのダイアローグでは、ソクラテスによって自らに下される否定的評価を喜ぶ話者の様子が複数箇所において描かれている。以下に示す『ラケス』からの抜粋では、その話者の一人のニキアスが、「自己自身にとっての人間」としてのイデオロギーが、ソクラテスによって否定的に評価された「他者の眼に映る人間」のものとなり、多面的な検討の対象とされてしまうことを「楽しい」と好意的に受け止めている様子が記されている。小説における笑いのアンビヴァレンスも、このような好意・愛的関係の土台の上に実現されるものだとバフチンは捉えているように思われる。

ニキアス：誰でもあまりソクラテスに近づいて話をしていますと、はじめは何か他のことから話し出したとしましても、彼の言葉にずっとひっぱりまわされて、しまいにはかならず話がその人自身のことになり、現在どのような生き方をしているか、またいままでどのように生きてきたか、を言わせられるはめになるのです。・・・私はこの人とつきあうのが楽しく、われわれの今までにしたことであれ今していることであれ、それがりっぱな仕方でされていない、ということに気づかされることは、すこしも悪いことではないと思うのです。（プラトン一九七五b、一三一頁）

Sullivan, Smith, & Matusov（2009, pp.340-341）も、バフチンのソクラテス論を総論する中で、一方的な攻撃ではなく、上記のニキアスのことばにあるように、人々が相互に批判を行いながらポジティブな雰囲気の中で互いの存在を認め合う「心地よい共同体の価値」を創出していくことが、笑いの本質であると指摘している。裏を返すならば、他者による否定的評価は、双方への愛・好意に基づくものでない限り、そのアンビヴァレンスを失い、相手の笑いではなく攻撃を引き起こす可能性のある諸刃の剣なのだろう。実際、ソクラテスは彼の言動を快く思わない人々によって裁判に引き出され、無実の罪で死刑を宣告されている。彼が投げかけたカーニバルの笑いは、決してすべてのアテネ市民に受け入れられていたわけではなかったのである。バフチン（一九八八、二八五頁）は、このような他者への態度を、笑いの反意語である「怒り」と呼ぶが、これはまさに人々の言説が詩（モノローグ）にとどまろうとする状況において発生する情動的反応といえる。

現代の日本社会においては、かつてと比較して、異質な文化を背景とする他者との交流機会ははるかに増加している。そしてソクラテス・エウリピデスが生きた当時のアテネのように、社会経済的な地位の低下も加わり、かつてのように、既存の権

威的な道徳律に他者を従わせる（言語認識の自動化に向かう）ような交流のあり方も通用しなくなってきている。つまり、他者の立場を尊重し、彼らと同じ立場で、自分たちのイデオロギーとの意味交渉を行うダイアローグの必要性が高まっているということである。

このような状況では、他者が持ち込む様々な異質な観点を考慮しながら、また同時に、自分たちのイデオロギーとの関係を探り続ける（言語認識の異化に向かう）、ソクラテスのダイアローグ篇やエウリピデスの悲劇の登場人物らが示したような、揺れ動く自意識を展開し、またそれを自律的にコントロールできることが必要なのだろう。これは優柔不断さを示しながらも、他者への好意的関心を持って、他者と共に生きる道を探り続ける、賢明な愚者としてのコミュニケーションを発揮する能力ということである。むしろこのような状況において、自分たちの既存のイデオロギーの権威性に固執し、新たなイデオロギーとの出会いを拒絶するような認識の揺るぎなさは、むしろ他者への怒りを招き、深刻な暴力的紛争を引き起こす可能性があるという点で不適切なものだろう。

その意味では、他者とのダイアローグを通し、自分たちが依拠するイデオロギーを柔軟に変更できる人々が展開する小説およびラズノレーチエを理想的なものとして論じるバフチンの議論は、現代社会において、より一層の意義を持つものといえる。他者との出会いを紛争ではなく、互いの世界観を豊かに創造していく機会にしていくため、多くの市民が他者への好意・愛をはぐくみ、この他者とアンビヴァレントな笑いを発揮できるための具体的な方策を、われわれはこのバフチンの詩・小説論から引き出すべきだろう。

〈注〉

1　イデオロギーはバフチンが多用する概念であり、個々人において抱かれ社会的な共有も期待されるイデエ（観念：考えていること）の総体ないし抽象的な意味を含む世界観として扱われる（田島二〇一九b、一六四頁／二〇一九c、一九四頁）。バフチンの議論において、ことばもこのイデオロギーを構成するものとして捉えられ、ほぼ同義の概念として扱われている箇所も多い。

2　異化はロシア・フォルマリズム運動の中心人物だった文芸学者・シクロフスキー、V・Bにより、また自動化はやはりこの運動に参加していたヤクビンスキー、L・Pによって導入された概念である。

3　プラトンの著作は執筆時期により、初期・中期・後期に分類される（上田二〇〇一、一―九頁）。バフチン（一九九六、二二七頁）は、後期の著作においては自らの教説を弟子に教え込む「内容のモノローグ主義」が見られると指摘し、分析の対象から外している。バフチンの論に従い、本論文の分析対象も、プラトンの初期・中期の作品に限っている。

4　二〇一九年八月二十四日に訪問したドイツ・ファストナハト博物館(Deutsches Fastnachtmuseum)における展示物解説および、博物館専門ガイドの Britta Volbers 氏による解説に基づく。

5　晩年に記録されたインタビューにおいてバフチンは、彼が若い頃に属していた学術サークルの雰囲気を、「学識ある道化師やいたずら者」が幅広いテキストを読み込み、またそれらをユーモラスに諷刺する、陽気な祭典のようなものだったと述べている(Gratchev & Marinova, 2019,

pp.50-54)。彼のいうカーニバルは、彼自身が体験した、このような学術的コミュニケーションを可能にする舞台装置としてもイメージされていたのかもしれない。

〈付記〉

本論文は、独立行政法人日本学術振興会・科学研究費助成事業（基盤研究（C）・課題番号：18K03060・平成三十年採択）の助成を受けて執筆した。

〈引用文献〉

バフチン、M・M　新谷敬三郎（訳）（一九八八）．一九七〇―七十一年の覚書　バフチン、M・M　新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛（訳）ミハイル・バフチン著作集⑧：ことば　対話　テキスト（二七九―三一九頁）新時代社

バフチン、M・M　望月哲男・鈴木淳一（訳）（一九九五）．ドストエフスキーの詩学　筑摩書房

バフチン、M・M　伊東一郎（訳）（一九九六）．小説の言葉　平凡社

バフチン、M・M　伊東一郎（訳）（二〇〇一a）．小説の言葉の前史より

バフチン、M・M　伊東一郎・北岡誠司・佐々木寛・杉里直人・塚本善也（訳）ミハイル・バフチン全著作第五巻：〈小説における時間と時空間の諸形式〉他　一九三〇年代以降の小説ジャンル論（四二―四六七）水声社

バフチン、M・M　杉里直人（訳）（二〇〇一b）．叙事詩と小説：小説研究の方法論をめぐって　バフチン、M・M　伊東一郎・北岡誠司・佐々木寛・杉里直人・塚本善也（訳）ミハイル・バフチン全著作第五巻：〈小説における時間と時空間の諸形式〉他　一九三〇年代以降の小説ジャンル論（四六九―五二一頁）水声社

バフチン、M・M　貝澤哉（訳）（二〇一八a）．修辞学が、その嘘偽りの程度に応じて・・・　東浩紀（編）ゲンロン9：第一期終刊号（一四二―一四九頁）ゲンロン

バフチン、M・M　貝澤哉（訳）（二〇一八b）．笑いの精神からの小説の誕生　東浩紀（編）ゲンロン9：第一期終刊号（一五〇―一五四頁）ゲンロン

Christen, C. (2009). Die Plakette: Schmuckstück, Eintrittsbillet und Sammlerobjekt. Fasnachts-Comité (Ed.) *Basler Fasnacht-vorwärts, marsch! : Läase-loose-luege!* (pp.96-103) Basel, Swiss: Christoph Merian Verlag.

Cornford, F.M. (1932). *Before and after Socrates*. London: Cambridge University Press.（コーンフォード、F・M　山田道夫（訳）（一九九五）．ソクラテス以前以後　岩波書店）

エウリーピデース　中務哲郎（訳）（一九九〇）．オレステース　細井敦子・安西眞・中務哲郎　ギリシア悲劇全集8巻（二四七―三五五頁）岩波書店

Gratchev, S.N., & Marinova, M. (Eds.) Marinova, M. (Trans). (2019). *Mikhail Bakhtin: The Duvakin Interviews, 1973*. Lewisburg, Pennsylvania: Bucknell University Press.

後藤明正（一九九五）．小説は何処から来たか：二〇世紀小説の方法　白地社

Havelock, E.A. (1963). *Preface to Plato*. Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press.（ハヴロック、E・A　村岡晋一（訳）（一九九七）．

プラトン序説　新書館）
廣川洋一（一九八〇）．プラトンの学園アカデメイア　岩波書店
逸見喜一郎（二〇一八）．ギリシャ・ラテン文学：韻文の系譜をたどる15章　研究社
岩田靖夫（二〇一四）．増補ソクラテス　筑摩書房
Kaiser, W. (1973). Wisdom of the fool. In P.P. Wiener (Ed.) *Dictionary of the history of ideas: Studies of selected pivotal ideas volume IV* (pp.515-520). New York: Charles Scribner's Sons.（カイザー、W（一九八七）．高山宏・寺島悦恩・森利夫（訳）愚者の知恵：世界は「フールたちの大いなる劇場」である　高山宏・寺島悦恩・森利夫（訳）愚者の知恵（四四―七四頁）平凡社）
貝澤哉（二〇一八）．現象学から笑いと小説の理論へ　東浩紀（編）ゲンロン9：第一期終刊号（一六〇―一六六頁）ゲンロン
金山弥平（二〇一二）．プラトンと書かれたテクストの問題　*Global COE Program International Conference Series (Proceedings of the 13th International Conference), De l'herméneutique philosophique à l'herméneutique du texte*, pp.131-141.
川那部和恵（二〇一一）．ファルスの世界：一五～一六世紀フランスにおける「陽気な組合」の世俗劇 溪水社
北野雅弘（一九九五）．模倣とメニッポス風刺　フィロカリア 12、一三―二九
北野雅弘（二〇一一）．ギリシア悲劇の詩学：カタルシスからポリフォニーへ　西洋比較演劇研究 10、一七―三四
久保正彰（一九九二）．ギリシア悲劇とその時代　松平千秋・久保正彰・岡道男（編）ギリシア悲劇全集別巻（一―四八頁）岩波書店
桑野隆（二〇〇九）．危機の時代のポリフォニー：ベンヤミン、バフチン、メイエルホリド　水声社
桑野隆（二〇一一）．バフチン：カーニヴァル・対話・笑い　平凡社
Lefkowitz, M. (2016). *Euripides and the gods*. New York: Oxford University Press.
Metzger, W. (2004). *Das grosse Buch der Rottweiler Fastnacht: Geschichte, Formen und Funktion eines urbanen Brauchs*. Vöhrenbach, Vöhrenbach, Germany: dold.verlag.
森本真実（一九九三）．ファストナハト：その伝統と解釈について　倉知恒夫・前田彰一・水之江有一（編）祭のディスクール：民衆文化と芸術の接点（一七四―一八七頁）多賀出版
中務哲郎（一九九〇）．『オレステース』解説　細井敦子・安西眞・中務哲郎　ギリシア悲劇全集8巻（三九五―四一一頁）岩波書店
中澤務（二〇〇一）．プラトンはなぜ詩人を批判したか（1）：ソクラテスと吟誦詩人　北海道大学文学研究科紀要105、一―一九
西尾浩二（二〇〇四）．プラトンのメディア教育論：『国家』の「詩人追放論」によせて　古代哲学研究室紀要13、七四―八九
プラトン　藤沢令夫（訳）（一九七四a）．パイドロス：美について　田中美知太郎・藤沢令夫（編）プラトン全集5（一二七―二六七頁）岩波書店
プラトン　加来彰俊（訳）（一九七四b）．ゴルギアス：弁論術について　田中美知太郎・藤沢令夫（編）プラトン全集9（一―二四三頁）岩波書店
プラトン　藤沢令夫（訳）（一九七四c）．メノン：徳について　田中美知太郎・藤沢令夫（編）プラトン全集9（二四五―三三二頁）岩波書店
プラトン　今林万里子（訳）（一九七五a）．エウテュプロン：敬虔について　田中美知太郎・藤沢令夫（編）プラトン全集1（一―四六頁）岩波書店

プラトン　生島幹三（訳）（一九七五b）．ラケス：勇気について　田中美知太郎・藤沢令夫（編）プラトン全集7（一〇七―一六六頁）岩波書店
プラトン　森進一（訳）（一九七五c）イオン：『イリアス』について　田中美知太郎・藤沢令夫（編）プラトン全集10（一一三―一五五頁）岩波書店
プラトン　藤沢令夫(訳)（一九七六）．国家：正義について　田中美知太郎・藤沢令夫（編）プラトン全集11（一七―七五八頁）岩波書店
Snell, B. (1964). *Scenes from Greek drama*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
Sullivan, P., Smith, M., & Matusov, E. (2009). Bakhtin, Socrates and the carnivalesque in education. *New Ideas in Psychology, 27*, pp.326-342.
田島充士（二〇一九a）．『ダイアローグのことばについて』解題：異質な文脈へ開かれたコミュニケーションの実現を目指して 田島充士（編）ダイアローグのことばとモノローグのことば：ヤクビンスキー論から読み解くバフチンの対話理論（八〇―一一九頁）福村出版
田島充士（二〇一九b）．バフチンによるヤクビンスキーのダイアローグ論の引用と発展的展開：『小説の言葉』を中心に　田島充士（編）ダイアローグのことばとモノローグのことば：ヤクビンスキー論から読み解くバフチンの対話理論（一四八―一九一頁）福村出版
田島充士（二〇一九c）．ポリフォニー・ホモフォニー論の視点からみたダイアローグとモノローグ：『ドストエフスキーの詩学』を中心に　田島充士（編）ダイアローグのことばとモノローグのことば：ヤクビンスキー論から読み解くバフチンの対話理論（一九二―二四二頁）福村出版
高橋憲雄（一九九五）．ヘラクレイトス：対話の論理の構築と実践を目指して　晃洋書房
丹下和彦（二〇〇八）．ギリシア悲劇：人間の深奥を見る　中央公論新社
トゥキュディデス　藤縄謙三（訳）（二〇〇〇）．歴史1　京都大学学術出版会
上田徹（二〇〇一）．プラトン：初期対話篇研究　東海大学出版会
ヴェルドン・J　池上俊一（監）吉田春美（訳）（二〇〇二）．図説笑いの中世史　原書房
Willeford, W. (1969). *The fool and his scepter: A study in clowns and jesters and their audience*. Evanston, Illinoi: Northwestern University Press（ウィルフォード・W　高山宏（訳）（二〇一六）．道化と笏杖　白水社）
Welsford, E. (1935). *The fool: His social and literary history*. London: Farber & Farber.（ウェルズフォード・E　内藤健二（訳）（一九七九）．道化　晶文社）
Zappen, J.P. (2004). *The rebirth of dialogue: Bakhtin, Socrates and the rhetorical tradition*. Albany: State University of New York Press.